

みどりと
技術だより

西表森林環境シンポジウムを開催!



「西表ヤマネコクラブ(地元小中学生)」の発表

平成 22 年 1 月 16 日、沖縄県八重山郡竹富町の竹富町離島振興総合センターにおいて、「西表森林環境シンポジウム」(主催:九州森林管理局)が開催されました。シンポジウムは、サトウキビの収穫時期やインフルエンザの流行などにより出足が心配されましたが、約 100 名を超える参加者がありました。



沖九州森林管理局長

はじめに、沖修司九州森林管理局長が「西表島を『森林生態系保護地域』に設定してから 18 年、島を訪れる観光客などの大幅な増加により、日本最大規模のマングローブ林や国指定天然記念物のイリオモテヤマネコなど西表島の希少野生動植物を取り巻く環境は大きく変化しています。本日のシンポジウムが、西表島の森林環境の保全活動や健全な利用推進に一層役立つよう期待しています」とあいさつ。



質問する参加者

その後、国有林や関係団体などから西表島の自然や環境に関する保全活動が報告され、引きつづいて、琉球大学熱帯生物圏研究センターの馬場繁幸教授による基調講演「西表島のマングローブ林の現状と課題」と「西表島の森林の保全とふれあいの推進」についてのパネルディスカッションが行われました。



パネル展示



琉球大学熱帯生物圏研究センター馬場繁幸教授

基調講演

西表島のマングローブ林の現状と課題
冒頭、地球温暖化(海面の上昇)によって環境悪化が進む海外のキリバスやツバルなどの現状を報告。
西表島は大陸から離れてきた島であり、海洋島のガラパゴスとは成り立ちが違ふ。そのような表現をむやみにすべきでないこと。街路樹など島外の樹木を安易に導入すべきでないことなどを強調。最後に今後このようなシンポジウムが必要と述べられ降壇された。

西表島のマングローブ林の現状と課題

マングローブ林の一種マヤシキはインドネシア

活動報告では、最初に西表森林環境保全ふれあいセンターの杉野所長が、西表島の国有林で取り組んできた保全活動と利用状況について、次に仲間川保全利用協定の代表締結者が同河川周辺の環境負荷を軽減する取り組みについて、最後に地元小中学生で構成している「西表ヤマネコクラブ」が12年間に亘り取り組んできたイリオモテボタル、ビーチクリーンアップ、川の水質調査などの活動について発表しました。

- 「パネルディスカッションメンバー」
- ・コーディネーター 馬場 繁幸 琉球大学 熱帯生物圏研究センター教授
 - ・パネリスト 川満 栄長 竹富町長
 - 劉部 博文 環境省西表自然保護官事務所自然保護官
 - 藤崎 雅夫 仲間川保全利用協定締結事業者の代表
 - 伊谷 玄 西表島エコツーリズム協会事務局長
 - 山城まゆみ 大富地区区長
 - 平沼 孝太 沖縄森林管理署長
 - 杉野 恵宣 西表森林環境保全ふれあいセンター 所長



パネルディスカッションの様子

パネルディスカッションでは、馬場教授がコーディネーターとなり7名のパネリストが、西表島の森林の保全やふれあいの推進について熱い意見を交わし、会場からも、西表島の森林や休耕田のあり方についての意見や、森林保全を念頭に置いたガイドの資質の向上も必要ではとの問題提起など多くの発言があり、シンポジウムは盛会のうちに閉会しました。会場には、小中学校の児童生徒や当局の森林保全活動に関するパネル24枚が展示され、参加者の目を引いていました。

平成21年度 技術開発委員会 in 森林技術センター

平成21年12月15～16日、森林技術センターにおいて、平成21年度九州森林管理局技術開発委員会を開催しました。

初日は、平成21年度技術開発課題中間報告6課題及び完了報告1課題と、林野庁から指示された平成22年度重点課題「森林における生物多様性の保全等の森林管理技術に関するもの」に対して応募のあった福岡署（間伐が林内の生物多様性に与える影響の評価）、長崎署（ツシマヤマネコの生息環境に配慮した森林施業）、森林技術センター（生物多様性保全等のためのニホンジカの効果的・効率的捕獲手法等の開発・実証）の3課題について、熱心に審議が行われました。その後、宮崎市一ツ葉海岸のイヌマキ植栽試験地で発生しているキオビエダシャクの被害状況を観察し、今後の対応について各委員から意見を聞きました。



技術開発委員会



ロングリーチグラブ等で搬出した伐採跡地



プランティングチューブ



一ツ葉海岸松林



キオビエダシャク

翌日は、21年度重点課題の自動耕耘植付機によるコンテナ苗植栽試験箇所の現地検討を行った後、技術開発に係る総括的な意見交換を行いました。委員から「全般的な問題として生物多様性保全の観点から、九州では特に効果的なシカ被害防止対策が必要」との意見が出されました。さらに、「応募のあった3課題は、九州の森林・林業の代表的な生物多様性保全に関連する課題である。実施する意義は大きい」等の意見が出されました。

なお林野庁へ応募する課題については、委員会の意見等を踏まえ局内で検討した結果、森林技術センターの課題が選定されました。

大隅半島緑の回廊

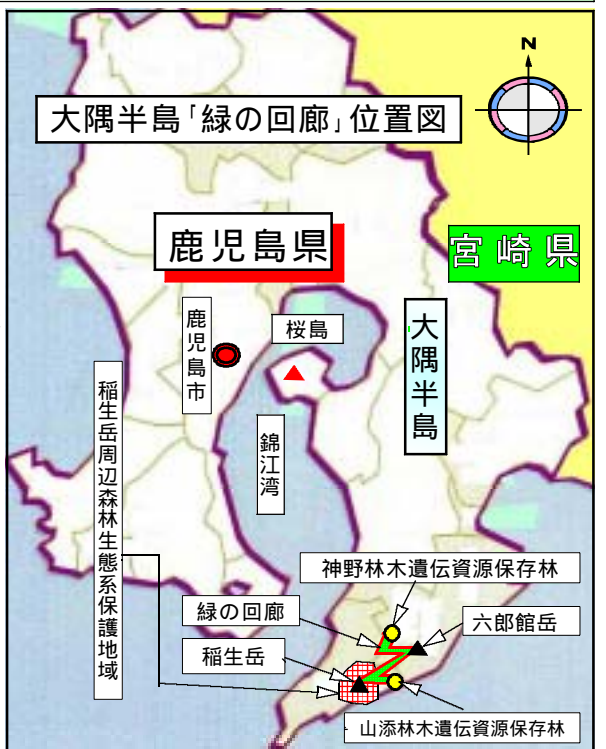
モニタリング調査

現地検討会 検討委員会を開催!



↑ 鹿児島県肝属郡錦江町重岳付近の国道 448 号から見た「大隅半島緑の回廊」。遠方の山地のうち、中腹部にある重岳林道より上部が「緑の回廊」部分になる。

平成 21 年 12 月 15 日、鹿児島県肝属郡錦江町の大隅森林管理署管内荒西国有林等において、鹿児島国際大学の吉良今朝芳教授、くすのき自然館の立山芳輝理事長、西南日本植物情報研究所の堀田満氏をはじめ局署の関係職員、事務局の日本森林技術協会の加藤仁地球環境部長など 22 名が参加し、「大隅半島緑の回廊モニタリング調査現地検討会・検討委員会」が開催されました。



現地検討会

現地検討会では、「緑の回廊内の人工林については多様な樹種や複数の階層から成る天然林への誘導を図る」との設定方針に基づき、区域内に間伐モデル林を設定し、そのモニタリング調査の内容や手法を検討する

ため、広葉樹の侵入状況や下層植生などを丹念に観察して回りました。その後の検討委員会では、混交林化した人工林への照葉樹の導入、動物や昆虫の調査時期、ニホンジカの南下・生息の実態調査などの検討と併せ、モデル林の対象林分は 20 ~ 30 年生の人工林とする、プロットは標高を考慮しベルト状に設定する、伐採方法は列状間伐を主に将来は択伐や小面積皆伐も実施してみてはどうかなど、沢山の意見や要望が出されました。

最後に委員会は、現地検討会や検討委員会の意見を整理し、モニタリング調査に反映することとして閉会しました。

大隅半島緑の回廊

大隅半島緑の回廊は、国有林野の保護林管理の充実強化を図る目的で、保護林相互の連結を通じたネットワークの形成により野生生物の自由な移動の場を整備し、より広範で効果的な森林生態系の保護を図る観点から平成 13 年 3 月、鹿児島県大隅半島南部に位置する稲生岳周辺森林生態系保護地域を中核に、西に位置する山添林木遺伝資源保存林と結び、北に位置する神野林木遺伝資源保存林とを結ぶ稜線沿い約 1400 ㍓の森林を設定。

稲生岳周辺の林相は、イスノキ・ウラジロガシ群集を構成する照葉樹林（一部は人工林）で、南・北限とする植物や固有種をはじめ、クマタカやコウモリ類などの希少種や絶滅危惧種など貴重な動植物種が生育・生息している。



クマタカ



コウモリ類

森林林業体験交流促進事業

国有林をフィールドとして実施する自然体験活動等による森林環境教育促進事業。

当局の平成 21 年度の取組概要は、熊本森林管理署と熊本市立金峰山少年自然の家との間で締結している遊々の森「よかよか金峰の森」において展開される森林環境プログラム（モデル）の策定。対象は熊本市内の全小学校 5 年生。

プログラムには、フィールドの整備や新たな観察コースの設計、フィールドマップの作成なども盛り込む。策定に当たっては同少年自然の家と連携。また、現地での検討会も実施する。

旬の花



ヒゴツバキ

第6回 実践・公開講座

竹籠づくりにチャレンジ

竹細工

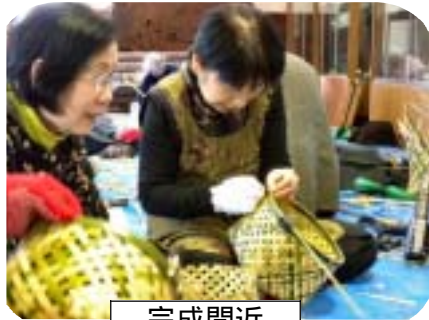
1月24日、監物台樹木園みどりの交流館において、今年度最後となる第6回実践・公開講座「竹細工」を開催しました。講座には26名が参加。講師に熊本市伝統工芸館竹細工サークルの方々9名を招き、見るからに美しい四つ目の竹籠づくりにチャレンジしました。

作業はまず竹ひごの編み込みからスタート。交差し合うように編んでいくことは意外と難しく、殆どの皆さんがこの作業のみで午前中を終えました。



こっかな？

午後は縁の仕上げ。縁を切り取り形を整えれば完成は間近ですが、多くの方が四苦八苦の様子。しかし、さすがは匠の技。講師の方々の指導を受けると、参加者は徐々に要領をつかみ、時の経つのも忘れ竹籠を仕上げていきました。最後に、参加者はすっかり竹細工の魅力にはまった様子で、「自分でもびっくりの出来映え。未長く使いたい」「時間内に仕上げられなかったが、作り方を教えていただいたので帰ったらすぐに完成させたい」等の感想を述べていました。



完成間近

編集後記

先日、実に3年ぶりとなるスキーに行きました。久しぶりの雪山では、転びながらも次第にコツを思い出し、余裕ができた頃には雪山の景色の美しさに感嘆の声を上げていました。ウィンタースポーツは若い世代が山に出向く数少ない機会であるように思えます。若者たちが山の魅力や、林業に目を向けてもらう良いきっかけとなるのではないのでしょうか。というのも、長野県のあるスキー場では、間伐材を用いたリフト乗り場が建設されたり、食堂の箸に間伐材を使用したりされているそうです。山をフィールドとする産業が協力し合い、山村地域を盛り上げていく。こういった取り組みに我々国有林野職員も目を向けていく必要があると、新規採用から約1年、これまでとは山の見方が変わってきていることを感じた今日この頃です。

緑の普及係 古川 洸太郎

一枚からできる地球への思いやり

～九州森林管理局では地球温暖化防止のため、再生可能な間伐材製品利用を推進しています～



伝えたい木の文化、残したい美しい森
「美しい森林づくり推進国民運動キャッチフレーズ」

